

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.113

2013.2.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と土器の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

29

## 「他大学研究室を訪ねる

## 学生同士の交流を」

平成22年のNHK朝ドラ『ゲゲの鬼太郎』をみていると何回も深大寺が出てきた。もう50年以上も前 昭和30年5月15日の一日を思い出す。私が早大・国大・明大の考古学専攻学生に呼びかけて見学会。小金井の武蔵野郷土館と深大寺を見学し、深大寺の公園芝生に座って『関東学生考古学ゼミナール』の設立を私は提案した。

キッカケは4月14日 明大で東京考古学会があり、杉原荘介先生の『弥生時代年代決定に関する新見解』の講演を聴きに、国大・早大・慶大・立大・明大と大勢の学生が集まった。この時 学生たちが集まったの活動が出来たらなと思ひ、卒業する前にやってみたい仕事だと決心し、5月の呼びかけとなった。

日記に「新宿に出る。誰も来ない。国分寺で待つ。国大鳥畑君等三人が来る。四人で話してみるが いざとなると難しいもの。当分の間は皆が打ち解けるまでとしたいもの。その為に会を多く持とう。小金井に向かう。いたいた大勢。ちょっと驚く。早大・国大・明大と揃っている。深大寺に向かい国宝仏を拝観して、芝生に集まって僕が話をする。皆の賛成を得た。僕の行動と歩みを通してこの集いを立派なものにしよう。これを僕の卒業土産としよう」と書いている。杉原先生に相談。即断即決。16日には親善野球大会を和泉校舎校庭を借りてくれた。私は国大・早大・日大の研究室を訪ね野球への参加と、教授から優勝カップの寄付を頼む。集まった4000円で優勝カップを購入。22日当日各大学考古学講座は教授を中心に大勢集まる。嬉しかった。明大は決勝で国大に負ける。私はキャッチャー・ピッチャーは3年の坂本君。



▲1955年5月15日 集う会第1回 早大・国大・明大



▲明大考古の野球仲間

国大ピッチャーは樋口昇一さん。この野球は教授間に好評で秋の大会には参加したいという大学が増えた。杉原先生は明大がカップを取れないのは悔しいともう一つカップを買う。11月27日の大会には早大・国大・日大・明大の他に東大・慶大・立正大・教育大が加わって8校に。この時も明大は2位。多くの大学が参加して提唱者の私は喜びで一杯でした。が

本当の狙いは学生間の考古学を話題としての交流でした。卒業後 各大学の学生たちが集まって卒論発表会を持ったと聞き、一歩前進したと嬉しかった。

B型人間の私は考えるよりも行動する人間。じっとしているより、何かしているか出かけている。明大研究室は人の出入りも多く交流も出来て、楽しめ、学べる場であった。他大学の研究室もよく訪ねた。最も多いのは東大山内研究室で、文学部考古学研究室も訪ねるが取っ付き難く一度でこりた。つぎに多いのは国大で大場研究室と先輩や学生の集まる研究室に私は国大生の様に入出入りした。特に下伊那郡誌で来ていた永峰光一さんと親しく、グループの桐原さん・樋口さん・磯崎さん・岩野さん・鈴木さん・鳥畑さんの仲間に入れてもらった。小諸市氷遺跡調査では他大学では私一人仲間に入った。亀井正道さんも高校生の頃から大学時代や卒業後も親しくさせてもらった。早大も研究室を何回も訪ねるが学生よりも先輩の桜井さん・西村さん・玉口さん・大川さん等と親しくなり、大川さんからは卒業後研究所の刊行物全てを送ってくれた。西村さんは千葉県西之城遺跡の調査に誘ってくれた。慶大の江坂研究室は三田で遠かったので一度しか訪ねていない。江坂さんも

卒業後伊那と木曾にもこられ、抜き刷りや参考文献のコピーでお世話になった。不思議とどの大学でも先輩から可愛がられた。

東京の4年間は私にとって勉強と人の繋がりを作ってくれた最高の年月であった。

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

## 目次

■田舎考古学人回想誌 他大学研究室を訪ねる 学生同士の交流を 神村 透 …1  
■考古学の履歴書 公務員としての考古学研究者(第8回) 石井則孝 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第106回) 加藤晴彦 …3  
■考古学者の書棚 『入門パブリック・アーケオロジー』 五十嵐聡江 …4

## 考古学の履歴書

## 公務員としての考古学研究者(第8回)

石井 則孝

## 《考古学研究者の文章力》

## はじめに

現在日本考古学協会の会員数は4000名を越えている。考古学という世界を考えた時、これほどの人数を持つ研究集団が外国にあるだろうか。

坪井清足さんを中心に設立した日本遺跡学会は、昨年11月、10周年記念研究集会を奈文研の講堂で行った。会員数は設立当初からあまり変わらず約300人が登録されている。

個人で発掘調査を行いたい時、昔は協会員であれば文化庁へ発掘届を提出して許可が下りるので、研究するものにとって協会員の資格を得ることが最大の目標であった。文化財保護法の改正によって現在では法整備も進み、日本考古学協会も任意団体から法人としての団体へと発展している。

協会が設立されて60年を過ぎた今日、戦後の日本列島の開発によって埋蔵文化財の発掘調査は大規模化し、発掘報告書も膨大な数にのぼり今までの様に個人で所有するという事は完全に崩壊してきている。このような事情の中で研究報告書ではない一般向けに書かれた書物がどれほどあるのかを考えてみた。それには相当の文章力がないと読んでも面白くない。私が生きてきた時代から見てみると、3人の氏名を上げることができる。それは、直良信夫、藤森栄一、藤本英夫の3氏である。

## (一) 直良・藤森・藤本3氏の作品

この3氏の一般向けへの作品を列記してみると

直良信夫(1902~1985)

「子供の歳時記」葦牙書房 「中野の生いたち」葦牙書房  
「峠と人生」NHKブックス 「学問への情熱」佼成出版社  
「貝塚の話」さえら書房 「日本の誕生・原始カオス期の歴史」光文社 「峠路」校倉書房 「人間の歴史」福村書店  
「釣り針の話」池田書店 「野生動物観察記」校倉書房 等々で、その他に子供向けの本が多数ある。

藤森栄一(1911~1973)

「銅鐸」学生社 「旧石器の狩人」学生社 「かもしか道」学生社  
「二粒の粉」河出書房 「井戸尻」中央公論美術出版 氏は、自身で出版業、本屋も経営していたので、住んでいた諏訪地方の物語もかなりある。

藤本英夫(1927~2005)

「アイヌの墓」日経新書 「天才アイヌ学者の生涯」講談社  
「北の墓」学生社 「銀のしずく降る降る」新潮選書「知里真志保の生涯」新潮選書 「アイヌの国から一鷲塚鷲五郎の生涯」草風館  
「じゅうたんの上の馬」北海道新聞社 氏は高校の教師であったが、後半生は、朝鮮半島の歴史に相当の関心を持ち、ハングルを学び、いくつかのレポートを残していると聞いている。

以上を見ていただければ、50才以上の会員であれば、この3氏の一冊は読んでいると思っっているが…。私はこの3氏には大変親しくさせていただいていた。従って、学問の世界に限らず、人間性、生き方についても多くのことを学ばせていただいた。その後このような研究者が出てきたらどうか。文章がいくら上手でも、作家的手法で文章の書ける研究者が現在存在しているだろうか?絵の上手な方は多くいるようで、京大の研究

室から曾根さんという浅井忠ばりの絵を描くプロの画家も出現している。しかし、この3氏を越える研究者はいないと認識しているかいかかなものだろうか。

## (二) 和島賞をとった永井路子さんという作家

永井さんが、かつて私が奈文研に在職していた時、西の京の唐招提寺と薬師寺の本を書くために坪井清足部長のところを尋ねてこられた。その時たまたま私が唐招提寺講堂解体修理中の現場の発掘担当者に当たっていたので、坪井部長が永井さんへ「石井を尋ね、講堂基壇下に存在している地下遺構をご覧になってはいかが」とすすめられ、唐招提寺へお越しになった。

礎石が連なる大講堂に立った時の興味深々なまなざし、検出したばかりの新田部邸の石造りの配水溝を見た時の驚きの大きな目、今も忘れられない印象として私の心に残っている。

その後帰京されて、永井さんは、鑑真和上について相当調べられたようであった。研究書としては、安藤更生博士の「鑑真和上傳の研究」があり、読みものとしては、井上靖の「天平の薨」があった。それらを読み、永井さんは、唐招提寺の講堂が平城宮の朝堂院の一棟を移築して建造されたのを知り、聖武天皇を中心とした平城京時代に焦点をあて政争渦巻く中で、鑑真和上がどのような立場にたつて、仏教の普及、受戒を行ってきたかを鑑真和上の心の内に入ってその日常生活を「氷輪」という題で歴史小説に書き上げた。その成果が、女流文学賞という賞をいただくこととなり、歴史小説家としての不動の地位を得たのであった。

その後の永井さんの行動は、私が多摩ニュータウンの発掘に携っていた際も、時々発掘現場へお越しになり、大変な勉強をされていたようであった。永井さん宅へ発掘現場のご案内を差し上げるとどこへでもお出でになった。毎回色々な質問をされていたが、一切メモはせず全て頭の中に入れていた。それがいつの間にか一冊の歴史小説として本屋の店頭に着かれていた。これには流石と云わざるを得ない。新橋駅の近くに所在した伊達藩邸の調査中にお見えになり、その成果も取り入れて上梓したのが「葛の葉抄—あや子、江戸を生きる」の一冊である。江戸の清少納言といわれた只野真葛の生涯を小説化したものである。

松本清張をはじめとして、作家の頭の構造・良さは凡人にははかり知れないが、今回永井路子さんまで取りあげて本文を書いたことは、考古学研究者の中にも作家がいるということで、それが上記した直良・藤森・藤本の3氏である。この3氏の行動は、日本中を旅し、見聞を広めていったことにあった。「百聞は一見に如ず」の格言があるが、アーケオロジ—つまりアルケ・アルケオロジ—を若い研究者は積極的に行っていただきたい。外国へ新しい刺激を求めて出掛ける若人が減っていると聞いている。

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城京跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職



無銭旅行もよし、冒険旅行もよし、外国語を学んで大いに生きた学問の道へと進んでいただきたい。

おわりに

最近考古学には関係ない文章を書かされたので、考古学とは?を改めて考えてみた。

考古学は入りやすい学問であるが、その奥は深い。人間が作ってきたあらゆるものを対象に研究していかねばならない大きく大変な学問である。そんなことを考えているうちに、ようやく判ってきた事柄がある。

それは、芸術学・建築学を研究する人々が羨ましくてしょうがない。残されてきた絵画・彫刻・陶磁器・建築物等、中世

以降であればその作者を解明することができる。昨年、ラファディオ・ハーンの三男で洋画家の小泉清の半世記を書かせてもらう機会があった。そこには、清の残した作品があり、親しい友人へ宛てた手紙もあり、調査していくとどんどん新しい資料が見つかり、興味が深くなり一気に文章をものにするのが出来た。しかし、考古学では、目の前にすばらしい土器・埴輪があっても、それを作った人が見えてこない。哲学的に考えても想像の世界で終わってしまう。考古学上残された資料は、あくまでも研究資料であって芸術作品とはなりえない。作った個人が居ない。この差は何であるのであろうか?

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

## レーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 106

#### 桑飼上遺跡 ～ 京都府舞鶴市

加藤 晴彦

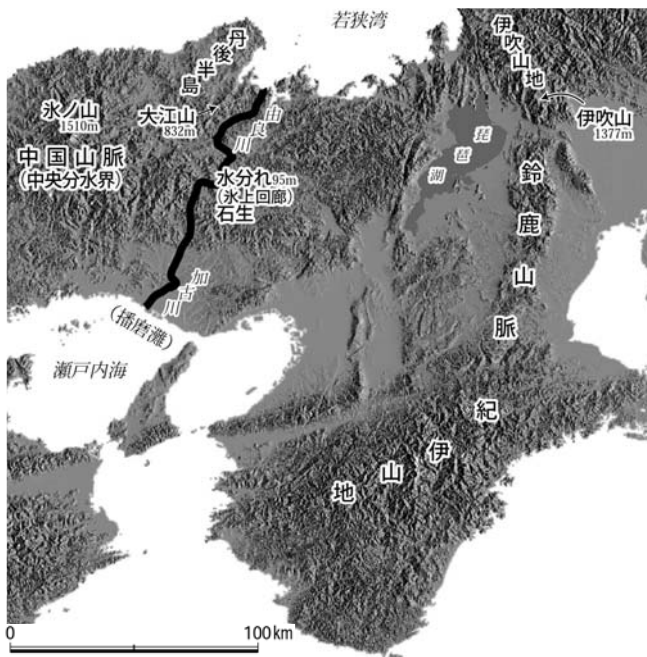
■1988年夏、大学1年生の時に初めて発掘調査に参加したのが、桑飼上遺跡でした。南山大学(名古屋市)の経済学部生だった私は考古学の門外漢なわけで、サークル「文化人類学研究会」の活動の一環として参加したのです。

右も左もわからない素人だったわけですが、現場担当者や他大学の方々の手ほどきを受けて、何とか取り組めたのです。合宿だったこともあり、その時の濃い時間が私の人生を方向づけたのです。その後は、学校はほったらかしにて発掘調査に明け暮れ、丹後の地で文化財担当として職を得ることになったのです。

■桑飼上遺跡は、京都府北部にある由良川が形成した自然堤防の細長い微高地上に展開する弥生時代から平安時代の遺跡で、河口部からの距離は15kmほどです。

各時代の中で目を引くのは、建物軸を統一した奈良時代の掘立柱建物跡群です。調査の都合上、建物群の全体像は不明ですが、B期建物跡群とされるものは、妻部4間の大型建物(建物跡13)を中心として、それを取り囲むように2間×2間～4間の5棟の建物(建物跡8～10・14・15)が整然と配列されていました。

報告書では、官衙とは言えないまでも、豪族居宅の域を超



中央が桑飼上遺跡(600mを隔てて桑飼下遺跡と隣り合っています)

えた官衙の様相が強い建物群ではないかと推定されています。

ちょうど、私が調査に参加した夏の時点では、これら掘立柱建物群跡の遺構面を精査する直前の段階で、自然堤防という遺構認識の難しい土質の土をせっせと掘っていました。今思い出しても土層の判断が容易ならざる土質で、当時の私には「全然見えない土」だったと記憶しています。

■少し話を戻して、地形的な説明をしますと、京都府は南北に細長い形をしていて、旧国だと北から丹後国・丹波国(東半分)・山城国の3つを含んでいます。北山城は平安の都・古都京都の地ですので、同じ京都府内ということで、北部南部を問わず、さぞ京都市的と思われるかもしれませんが、丹後と山城は大きく異なります。

丹後は、日本海に短く突き出た丹後半島地域と半島東側の若狭湾沿岸地域の一部で構成され、日本海沿岸文化圏に属します。また丹後南辺の大江山連峰が丹波との物理的な分断線となっていて、到底、京都市的と言い難い土地柄です。なお、桑飼上遺跡のある由良川下流域も丹後に入ります。

■また、丹後は、律令期以降は明確に山陰とされますが、大和から山陰をつなぐ古代官道の山陰道のルートは、大和-山城-丹波-但馬-因幡-伯耆-出雲-石見をとおり、山陰道の国々の中で唯一丹後だけ山陰道の本道が通らず、山陰道の丹後支路が延びているのです。これは古代官道が陸路を中心としたため、海路の比重が高い丹後の位置付けが反映したと想像されます。

しかし、古代官道のような政治性を帯びた道とは別に自然発生的道として、丹後と播磨を結ぶ「由良川-加古川の道」が想定されています。このラインは、最高所の標高95mという低さで日本海側と瀬戸内側をつないでいます。具体的な事例の

一つとしては、弥生時代中期の丹後の土器は播磨の様相が濃く、山城色は希薄なのです。

大型掘立柱建物群が建てられた奈良時代は由良川-加古川ラインと山陰道ラインが交差し、この時代には由良川-山陰道を通じて大和へ通じる「由良川-山陰道-大和」ラインも想起されます。

この由良川流域に展開する集落の一つが桑飼上遺跡であり、物流上の役割が目立つところなのです。

■物流というからには「運ばれるモノ」が必要なのですが、奈

良時代から平安時代にかけて、丹後では大規模な製鉄遺跡が確認されています。代表的な遺跡が丹後半島北部の内陸にある遠處遺跡や若狭湾に面した浦入遺跡などです。

想像たくましく言えば、丹後で生産された鉄が由良川-山陰道あるいは由良川-加古川という経路で流通した可能性を視座できないだろうか、そして、桑飼上遺跡がその物流管理の一部を担った可能性を視座できないだろうか、というものです。

■かなり「ひいき目」に描いた私の出発点「桑飼上遺跡」でした。

\* 次回のマイ・フェイバレット・サイトは山根航さんです。

## 考古学者の書棚

### 「入門パブリック・アーケオロジ」

松田陽・岡村勝行／同成社(2012)

五十嵐 聡江

アルカ通信を購読されている方の多くは、大学や研究所、自治体や博物館、そして地域社会の一員として様々な立場から考古学に携わっていると思います。昨今、声高に遺跡や考古資料の「活用」が叫ばれる中、「活用」のあり方や方向性、また「保存」と「活用」の両立など、悩む場面も多いのではないのでしょうか。かく言う私も日々の博物館業務として考古学ボランティア活動を推進したり、個人的にいくつかの地域の考古遺産を保存・活用する取り組みに関わっていく中で、同じように悩みながら活動を行っている一人です。

そのような悩みを共有し、考え方のプロセスを整理し、体系付けられた学問の高みにまで連れて行ってくれるのが、今回ご紹介する『入門パブリック・アーケオロジ』です。本書は2012年12月に刊行されたばかりで、十分に読み込んでいない本をご紹介するのはいささか気が引けますが、今回日本で初めて書籍化された「パブリック・アーケオロジ」を、考古学に関わる多くの方に知っていただきたいと思い、この本を選びました。本書の構成は以下のとおりです。

- 序章 パブリック・アーケオロジの導入に向けて
- 第1部 パブリック・アーケオロジ概論
  - 1章 世界のなかのパブリック・アーケオロジ  
ー その成り立ちと理論 ー
  - 2章 パブリック・アーケオロジの論点
  - 3章 日本におけるパブリック・アーケオロジ
- 第2部 パブリック・アーケオロジ関連資料
  - 1章 注目される活動事例
  - 2章 UCL 考古学研究所教育プログラム
  - 3章 欧州の考古学者
  - 4章 欧州の遺跡調査体制と近年の動向

まず、パブリック・アーケオロジという言葉は初めて聞いたという方も多いのではないのでしょうか。言葉自体もそうですが、本書の章立てを概観するだけでも欧州で生まれ、発展してきた学問分野であることが想像できるかと思います。詳細は本書をご一読いただきたいのですが、パブリック・アーケオロジは1970年代にアメリカで生まれ、1980年代以後にイギリスやオーストラリアなどの英語圏で発展し、2000年前後に日本にも紹介されました。私がパブリック・アーケオロジを知ったのも2004年春の修士課程1年生のときで、考古学と現代社会の関わりというテーマで勉強を始めたときでした。その当時は、

もちろん日本語の文献も少なく、またその定義も明確ではないことから、パブリック・アーケオロジを理解し説明するのに苦労したことを覚えています。現在でもその定義は様々に存在していますが、本書では「考古学と社会との関係を研究し、その成果に基づいて、両者の関係を実践を通して改善する試み」と広く定義づけられており、今後発展していく分野として枠を設けず、考古学と社会が接する部分のどんな瑣末なことであっても汲み取っていきこうという姿勢が感じられます。

著者のお二人はイギリスでパブリック・アーケオロジを学ばれ、現在、松田氏はイギリスの大学で教鞭をとられ、岡村氏は大阪府で遺跡の調査から学芸員までされたご経験をお持ちで、海外における事例紹介にとどまらず、イギリスで培われた理論に、日本の現状を踏まえ、「つなぐ」というキーワードで日本版パブリック・アーケオロジの構築を提案されています。

つい先日にも奈良文化財研究所主催の「遺跡等マネジメント研究集会」が、「パブリックな存在としての遺跡・遺産」というテーマで開催され、そこで松田氏がパブリック・アーケオロジについて講演されたそうです。今後、日本でもますますパブリック・アーケオロジの需要が高まることが予測されこの流れは、2年前の東日本大震災を受けてさらに加速していると感じます。東日本大震災では未曾有の災害とともに、津波の痕跡など考古遺産が持つ情報の公開や継承、高台移転と遺跡保護の問題など、考古学と現代社会の関わりを強く意識する機会となりました。このことは、本書でも指摘されているように考古学が過去だけではなく、現代との関わりにおいても論じられる必要に迫られており、その議論に参加することがパブリック・アーケオロジの構築だといえるのではないのでしょうか。

本書のあとがきでは「議論を始めるためには、まず反論を頂戴せねばならない。どうか遠慮なく我々を批判してほしい。批判のないところに議論は生まれないのだから。」と結ばれています。まさにパブリック・アーケオロジは議論することによって発展する学問分野です。私の拙い文章を読んで本書を手にとってくださった方が、よりよい考古学と社会の関係性の構築を目指して、パブリック・アーケオロジの議論に参加していただければ、この上なくうれしく思います。

### アルカ通信 No.113

発行日 2013年2月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801  
 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp  
 URL : <http://www.aruka.co.jp>